

子ども用



伝道地便り

2023年 第4期 西中央アフリカ支部

第1話 「いつもお祈りする女の子」	カメルーン
第2話 「パンを分けてあげた男の子」	カメルーン
第3話 「教会に来たお父さん」	カメルーン
第4話 「夜がこわい女の子」	ギニア
第5話 「親切なお隣さん」	ガーナ
第6話 「お昼を買うお金がない！」	ガーナ

ADVENTIST
MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団 伝道局 安息日学校部

伝道地便りの用い方のヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか挙げていきます。

- 1) 前もって何度か目を通し、自信を持って読む。
- 2) 棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。
- 3) 伝える時間はできるだけ短く。長くても5～7分。
- 4) 誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。
- 5) できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。
- 6) 時には、スキット(寸劇)風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」紹介しましょう。

1. いつもお祈りする女の子

カメルーン



セレスタ

セレスタは、5歳の女の子です。アフリカのカメルーンという国に住んでいます。

セレスタは、1日に何度もお祈りをします。そして、何か良いことがあると、いつもお母さんにこう言います。「ママ、どうしてこうなったと思う？ わたしがお祈りしたからだよ！」

あるとき、お母さんの頭が痛くなりました。とってもとっても痛かったのです。セレスタはお母さんがかわいそうになりました。そして、そーっと別の部屋に入り、少ししてから戻ってくると、お母さんに聞きました。

「ママ、まだ頭痛い？」

「もう、痛くないわよ」とお母さんは答えました。

「どうしてだかわかる？ わたしがママのためにお祈りしたからだよ！」とセレスタは言いました。

お母さんはにっこりしました。セレスタがお祈りをしてくれたのがとっても嬉しかったからです。

セレスタは幼稚園に行っています。時々、とっても難しい宿題が出ます。ある日、一生懸命に宿題をやっていたセレスタは、それが全部終わると、お母さんのところに走っていきました。「ママ！

どうして宿題が全部できたかわかる？ お祈りしたからだよ！」

お母さんはにっこりしました。セレスタがいつもイエスさまとお話ししているのは、とっても素敵なことだわ、とお母さんは思いました。

ある日、お母さんはセレスタに言いました。「あのね、セレスタちゃんのお友だちが病気になっちゃったの」。セレスタは心配になって聞きました。「お友だち？ だれのこと？」「牧師先生よ」とお母さんは言いました。セレスタはいつも牧師先生のことを「わたしのお友だち」と言っていたのです。「わかったわ、ママ。お祈りするね」とセレスタは言いました。

セレスタはすぐにお祈りし始めました。お家の礼拝の時間に、お父さんとお母さん、セレスタは、ひざまずいて手をつなぎ、輪になってお祈りしました。セレスタはこうお祈りしました。「大好きな神さま、わたしのお友だちを元気にしてください」。セレスタは毎日毎日お祈りをして、牧師先生はまた元気になりました。もちろん、セレスタはこう言いましたよ。「ママ、どうしてわたしのお友だちが元気になったかわかる？ わたしがお祈りしたからだよ！」

あるとき、セレスタは怖い夢を見ました。ものすごく怖い夢でした。それでお父さんをお願いして、怖い夢を見ませんように、と、お家の礼拝の時間にお祈りしてもらいました。次の日の朝、セレスタは起きるとニコニコして、大きな声で言いました。「ママー！ 怖い夢見なかったよ！」

お父さんは、セレスタが怖い夢を見ないように、毎晩お祈りしてくれました。そしてセレスタは毎朝、「ママー！ 怖い夢見なかったよ！」と、ニコニコしながら大きな声で言うのでした。

ある朝セレスタは、起きるといつもよりもずっとニコニコして、「ママー！ いい夢を見たよー！ イエスさまの夢だよー」と言いました。「子

どもがいっぱいいて、私もいて、イエスさまからプレゼントをもらったの！」

それからちょっと悲しい顔をしました。「あー、でも、どんなプレゼントだったかなあ。忘れちゃった」

今度はお母さんがニコニコする番でした。セレスタがとってもすてきな夢を見たのが、お母さんには嬉しかったのです。そして、詳しく話してもらおうと思って質問しました。

「どうしてイエスさまだってわかったの？どんなお顔だった？」

セレスタはまだ小さかったので、うまく説明できません。だから「ただ、わかったのよ」と、まじめなお顔で答えました。

どうしてイエスさまだとわかったのでしょうか。それは多分セレスタがいつもいつもイエスさまとお話ししていたからでしょう。セレスタはいつもお祈りしていたので、イエスさまがセレスタの一番のお友だちになったのです。だからイエスさまのお顔を見たときに、すぐにわかったのです！

聖書はわたしたちに、セレスタのようにいつもイエスさまとお話ししなさいと教えています。テサロニケの信徒への手紙一・5:17には、「絶えず祈りなさい」とあります。あなたはいつもイエスさまとお話していますか？

今期の13回献金の一部は、セレスタの住むカメルーンにセブンスデー・アドベンチストの学校を建てるために使われます。その学校で、子どもたちはこれからもイエスさまとお話しする喜びを学ぶことができるでしょう。皆さんの惜しみない献金を感謝します。

〈お話のヒント〉

- ・子どもたちに、地図でカメルーン的位置を示しましょう。カメルーンのパンドジョウンの位置も示すと良いでしょう。今期の13回献金は、この地にバイリンガルの小学校を建てるために使われます。子どもたちはこの学校で、フランス語と英語で授業を受けます。
- ・子どもたちに、セレスタが何について祈ったか

聞いてみましょう。答え：お母さんの頭痛のため、宿題ができるように、牧師先生の癒しのため、悪い夢を見ないように。子どもたちに、今週自分たちは何について祈ればよいか聞いてみましょう。聖書には、「絶えず祈りなさい」(テサロニケの信徒への手紙一 5:17)と書いてあることを確認しましょう。そして、セレスタのように、何でもイエスさまにお話しするように励ましてください。

- ・フェイスブックで写真をダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- ・西中央アフリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/wad-2023.
- ・この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の項目の具体例です。
「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」(「霊的成長の目標」No.5)
「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」(「霊的成長の目標」No.6)
「青年が神を第一とし、聖書的な世界観を実践できるように支援する」
(「霊的成長の目標」No.7)。詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

宣教メモ

- ・1926年11月、セブンスデー・アドベンチストとして初めてカメルーンにやってきたのは、アメリカ人のウィリアム・ハリソン・アンダーソンとT・M・フレンチでした。地元の首長ベッサラ・エトンは、伝道所を建設するために136エーカー(55ヘクタール)の土地を彼らに提供しました。
- ・カメルーンで最初の教会は1937年に建てられました。

2. パンを分けてあげた男の子

カメルーン



デビッド

小さなデビッドは、朝の6時にはもう、ちゃんと服を着て、幼稚園に行く用意ができていました。

お母さんがリュックを渡してくれました。リュックには、教科書、ノート、鉛筆、そして一番大事な、朝ごはんが入っていました。朝ごはんは、モチモチの美味しいパンでした。

デビッド幼稚園は7時に始まります。少しお勉強をしてから、いよいよ朝ごはんの時間になりました。デビッドは早速リュックからパンを取り出しました。ああ、お腹空いた！

パンを食べようとしていると、隣に座っている男の子が話しかけてきました。

「そのパン分けてくれる？」

その男の子にはパンがありませんでした。お母さんがパンを入れなかったのです。デビッドは自分のパンをちぎって、「はい、どうぞ」と渡しました。その子がパンをもらったのを見て、別の子が近づいてきました。

「僕にもそのパン分けてくれる？」

その子もパンがありませんでした。その子のお

母さんもパンを用意しなかったのです。デビッドはまたパンをちぎって、「はい、どうぞ」と渡しました。

すると、3人目の男の子が近づいてきました。デビッドはすぐに、何を言われるのかがわかりました。その子もパンを持ってきていなくて、お腹が空いていそうだったからです。その子も、やっぱりこう言いました。

「そのパン分けてくれる？」

デビッドの分のパンはもうあまり残っていません。どうしようかなと思ったとき、デビッドは聖書のお話を思い出しました。そのお話では、お腹を空かせた預言者エリヤが、貧しい家のお母さんのところに行き、「そのパンを分けてください」とお願いしました。けれどもその頃、ひどい飢餓が起こっていたので、そこにはパン1つ分の粉と油しかありませんでした。そのお母さんはそのパンを自分の子どもと一緒に食べようと思っていたのですが、それをエリヤに分けてあげました。神さまは奇跡を起こし、飢餓が終わるまで、粉と油が無くならないようにしてくださいました。その人も子どもも、お腹を空かせずにすんだのでした。デビッドがこのお話を安息日学校で聞いたとき、先生はみんなに、「お腹を空かせている人には分けてあげましょうね」と言ったのでした。

デビッドは、残っていたパンを半分に分けて、「はい、どうぞ」とその男の子にあげました。デビッドと3人のお友だちは、美味しいパンをモグモグと食べました。とても良い朝ごはんの時間でした。デビッドは、他の子たちを助けてあげられて良かったなあと、うれしくなりました。自分の分のパンは少なくなってしまうしましたが、幼稚園が終わってお昼ご飯を食べにお家に帰るまで、お腹が空くことはありませんでした。

次の日、また同じことが起こりました。デビッ

ドがパンを取り出すと、他の男の子たちが分けてもらいに来たのです。デビッドはまた分けてあげました。そしてまたうれしい気持ちになりました。それから、デビッドは毎日、朝のパンを分けてちょうだいと言われるようになりました。

幼稚園を卒園して小学校に通うようになると、色々なことが変わりました。小学校は 11 時に始まるので、朝ごはんは家で食べるようになりました。今度は学校ではお昼ご飯を食べるようになったのです。お母さんは、パンを持たせる代わりに、お金をくれるようになりました。それで自分でパンを買って食べるのです。でも変わらないこともありました。子どもたちはまだデビッドが買った食べ物を分けてと言ってくるのです。そしてデビッドはいつも分けてあげました。

デビッドは今 13 歳です。そしてこの 8 年間、ずっと自分の食べ物を分けてあげています。デビッドがとっても優しいので、クラスのお友だちは驚いて、「どうして分けてあげるの？」と聞いてきます。デビッドは喜んで、イエスさまが 5000 人や 4000 人の人々に食べ物に分け与えられたお話をします。イエスさまが何でもお弟子さんたちと分け合われたというお話をすることもあります。そして「ぼくも、イエスさまみたいに分けてあげたいんだ」と言うのです。

デビッドが何でも分けてあげるのを見て、クラスのお友だちも変わり始めました。みんなも、何もない子たちに食べ物を分けてあげるようになったのです。

デビッドは、分けることができるのは嬉しいと言っています。

「食べ物をあげすぎて、お腹が空くこともあります。でも、分け合うことでイエスさまのお手本に従うことができるのが嬉しいです。食べ物だけではなく、イエスさまの光も分けてあげられていると思います」

〈お話のヒント〉

- 子どもたちに、地図でカメルーンの位置を示し

ましょう。カメルーンのバンドジョウンの位置も示すと良いでしょう。今期の 13 回献金は、この地にバイリンガルの小学校を建てるために使われます。子どもたちはこの学校で、フランス語と英語で授業を受けます。

- エリヤとやもめの話 (列王記上 17:8~19) と、5000 人の給食 (マタイ 14:13~18)、4000 人の給食 (マタイ 15:32~35) の話を読んであげましょう。子どもたちに、やもめやイエスさまのように、周り分け合うように勧めましょう。
- 神さまは恵みを分かち合うために私たちを祝福してくださるという聖書の原則を教えましょう (使徒 20:36、ガラテヤ 6:2 参照)。エレン・ホワイトもこの原則についてよく書いています。「わたしたちは、他の人々に分かち合えるように、神に祝福を求めなければならない。受ける能力は、分かち合うことによるのみ維持することができる。」(『キリストの実物教訓』『希望への光』p.1237) また、『教会への証』6 巻 p.190 (英文) には、「受け取ったものを与える人々は、この世における最大の満足を得ることができる」とあります。
- フェイスブックで写真をダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- 西中央アフリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/wad-2023.
- この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の項目の具体例です。
「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」(「霊的成長の目標」No.5)
「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」(「霊的成長の目標」No.6)
「青年が神を第一とし、聖書的な世界観を実践できるように支援する」(「霊的成長の目標」No.7)
詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

3. 教会に来たお父さん

カメルーン



メフーマ

メフーマは、カメルーンに住む女の子です。メフーマにとって、安息日はうれしい日でした。教会で讃美歌を歌うのも、神さまのお話を聞くのも大好きでした。一番好きなのは、神さまにお祈りすることでした。

でもお母さんは悲しい顔をしていました。お父さんが教会に来なかったからです。お父さんは、家にいました。

お母さんは夜によく眠れず、悪い夢を見ているようでした。お父さんが聞きました。「どうしたんだい？ どうして夜眠れないんだ？」

「私たちは、結婚しているけど、一緒にないのよ」とお母さんは答えました。

お父さんはわけがわからないという顔をしました。

「どういうこと？」

メフーマも、お母さんは何を言っているのかなと思いました。

「あなたが何をしてくれても、うれしい気持ちになれないのよ。教会では、家族は一緒に祈り、

一緒に聖書を読み、一緒に教会に来なさいと言われるの。でも私たちは一緒に教会に行っていないから、悲しいのよ」

お父さんは不機嫌な顔になりました。「一緒に教会に行くなんて、そんなに大事なことはないよ」

でもお母さんは、お父さんに一緒に教会に来てほしいと心から思っていました。けれども、どうしたらよいのかわかりませんでした。お母さんは泣くことしかできませんでした。

メフーマは、お母さんが泣いているのを見ると悲しくなりました。そして「神さまとお話してみた？」と聞きました。

次にまたお母さんが泣いているのを見たとき、メフーマはもう一度聞きました。「ねえ、ママ。神さまとお話ししてみた？」

お母さんはお祈りを始めました。すると、良いことを思いつきました。

「メフーマちゃん、安息日に、パパに教会で習ったことをお話ししてみて。あなたの言うことならパパも聞くかもしれない」

次の安息日、メフーマは教会から帰って来ると、お父さんに、アブラハムの信仰について話しました。

「あのね、パパ。アブラハムにはすごい信仰があったんだよ。神さまから出かけるように言われたとき、何も質問しないで出ていったの」

その次の安息日には、メフーマはお父さんに、イエスさまがヨルダン川でバプテスマを受けたときの話をしました。

2年が経ちました。メフーマはお父さんに教会で習ったことを話し続けましたが、お父さんはまだ教会に行こうとしませんでした。

メフーマが8歳のとき、教会でお話することになりました。子どものための特別な安息日があって、子どもたちが教会のいろいろな役目をするようになったのです。メフーマはお説教をすることになりました。メフーマがお父さんに来てねと言ったので、お父さんは初めて教会に来てくれました。お父さんは遅刻してきましたが、メフーマのお説教を聞くことができました。

メフーマは、お祈りについてお話しました。教会に来たお父さんやお母さんたちに、子どもたちにお祈りすることを教えてくださいとお願いしました。そして子どもたちには、両親のために祈りしましょうと言いました。

その夜、寝る前に、メフーマはお父さんのところに来てこう言いました。「パパ、パパは会社に行く時はスーツを着て、遅刻しないように急いで行くよね。でも今日、教会には遅刻したし、会社に行くときみたいないい服は着てこなかったね」

そしてお祈りしました。「神さま、パパのことを見捨てないでください。どうか私たちを救ってください。アーメン」

お祈りが終わると、お父さんは泣いていました。

次の安息日、お父さんは教会に行きました。そしてその次の安息日、お父さんはイエスさまに従う決心をして、バプテスマを受けたのです。

それからは、安息日はメフーマにとって、とてもうれしい日になりました。お母さんも、お父さんも幸せでした。そしてメフーマは誰よりも一番幸せでした。

〈お話のヒント〉

- 子どもたちに、地図でカメルーンの位置を示しましょう。カメルーンのバンドジョウンの位置も示すと良いでしょう。今期の13回献金は、この地にバイリンガルの小学校を建てるために使われます。子どもたちはこの学校で、フランス語と英語で授業を受けます。
- お父さんがバプテスマを受けた2年後、メフーマは急病で亡くなりました。10歳でした。お母さんのジュヌビエーブはメフーマのお話をアドベンチストミッションに伝え、自分と父親は、イエスさまの再臨のときにメフーマと会うのを心から楽しみにしていると言いました。
- 子どもたちに、両親や家族のために祈るよう促しましょう。
- フェイスブックで写真をダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- 西中央アフリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/wad-2023.
- この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の項目の具体例です。
「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.5）
「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」（「霊的成長の目標」No.6）
詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

4. 夜がこわい女の子

ギニア



アダマ

アダマは、アフリカのギニアという国に住む5歳の女の子です。

ある夜、お母さんがアダマに、「寝る時間よ！」と言いました。

アダマは寝たくありません。だから「寝たくないなあ」と答えました。お母さんはちょっとこわい顔になりました。そして「ほら、アダマ、もう時間だから」と言いました。「わたし寝たくないの」とアダマは答えました。

お母さんはさっきよりもっとこわい顔になりました。そして「寝なさい！」と大きな声で言いました。でもアダマは寝たくありません。お顔がみるみる曇ってきて、とうとう泣いてしまいました。そして、「いやなの。本当に寝たくないのよ！」と泣き声まじりに言いました。

アダマが寝たくなかったのは、夜がこわかったからです。先週は毎晩こわい夢を見ていました。どんな夢だったのかは覚えていないのですが、いつも自分の泣き声や叫び声で目が覚めました。でもお母さんのおこった顔を見ると、何を言っても

ダメだなと思いました。お母さんの言うとおりにするしかありません。アダマは、できるだけノロノロとベッドに向かいました。

でもこわすぎて寝られません。長い時間、何度もゴロゴロして、やっと眠ることができました。けれども、まだ真っ暗なうちに目を覚まし、泣き声と叫び声をあげて、「お母さん、来て！助けて！」と大声で言いました。

2年が経ちました。毎晩同じようなことが起こりました。アダマは、よく眠れないせいで、体力のない病気がちな子になりました。夜がとても怖かったのですが、どうしたら良いのかわかりません。お母さんもどうしたら良いのかわかりませんでした。

アダマには、アダマたちの家から遠く離れた首都のコナクリに住んでいるおばさんがいました。アダマの悪い夢について聞いたこのおばさんは、よいことを思いつきました。

「この子をセブンスデー・アドベンチストの教会に連れて行きましょう。そして牧師先生に祈ってもらいましょう」

お母さんもアダマもクリスチャンではありません。おばさんも、以前はクリスチャンではありませんでした。でも、重い病気にかかってアドベンチストの宣教師に祈ってもらったことがあったのです。イエスさまがおばさんを癒してくれて、おばさんはイエスさまに従う決心をしました。そして今は、アドベンチスト教会の隣に住んでいます。

お母さんは、おばさんに連れて行ってもらうことに賛成しました。アダマは小さなバッグに荷物を詰めて、おばさんと一緒にコナクリに行きました。

おばさんがアダマのことを説明している間、牧師先生は優しい顔でアダマを見ました。こんなに

小さな女の子が2年間も眠れていないなんて、と、牧師先生はかわいそうに思いました。そして教会のみんなに、アダマのためにお祈りしてくださいとお願いしました。「もしこれがサタンの攻撃なら、イエスさまのみ名によって、その攻撃が終わるようお祈りしましょう」と牧師先生は言いました。

その夜、牧師先生と教会のみんなは、アダマのためにお祈りしました。するとアダマは、ぐっすり眠ることができたのです。こわい夢なんて1つも見ませんでした。次の朝起きたとき、アダマはとても良い気分でした。イエスさまがお祈りを聞いてくださったのです！ 2年ぶりに、一晩中眠ることができたのです。

アダマが最後にこわい夢を見てから1年が過ぎました。アダマは今8歳で、もう夜をこわがってはいません。そして、今はおばさんと一緒にアドベンチストの教会の隣に住んでいて、アドベンチストの学校に通っています。

「わたしはもうこわくありません。毎日とっても楽しいです。イエスさまが私たちのお祈りに答えてくださいました」と、アダマは言っています。

3年前の13回献金の一部は、ギニアのコナクリにあるセブンスデー・アドベンチストの学校に、新しい教室を作るために使われました。アダマのように、お祈りに答えてくださるイエスさまについて学ぶことのできる子どもが、もっと増えることでしょう。

〈お話のヒント〉

- 子どもたちに、地図でギニア共和国の位置を示しましょう。首都のコナクリの位置も示すと良いでしょう。3年前の13回献金で、この地の教会学校がもっと子どもたちを受け容れられるように増築がなされました。
- アダマのおばさんのウームーさんがイエスさまと出会ったときの話を読みましょう。
bit.ly/Adama-Auntie.
- フェイスブックで写真をダウンロードしましよ

う。bit.ly//fb-mq.

- 西中央アフリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。
bit.ly/wad-2023.

- この話は、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の以下の項目の具体例です。

「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」(「霊的成長の目標」No.5)

「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」(「霊的成長の目標」No.6)

「青年が神を第一とし、聖書的世界観を実践できるように支援する」(「霊的成長の目標」No.7)

詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

豆知識

- ギニアのニンバ山脈で、チンパンジーが食べ物をひと口サイズに切り刻むために道具を使っているのが初めて目撃されました。2009年には、石や木のハンマーを使ってトレキュリアの実を切り刻んで食べているのが目撃されました。



5. 親切なお隣さん

ガーナ



エリオット

7歳のエリオットは、アフリカのガーナに住んでいます。ある日、お隣のおばさんが話しかけてきました。

「あなたは教会に行っていないようだね。私と一緒に教会に行こう」

エリオットはおばさんの顔を見ました。確かに、エリオットは教会に行っていないです。でも、行ってみてもいいな、と思いました。というのは、こちらに引っ越してきたばかりで、近所にお友だちがいなかったからです。そして何より、神さまのことについて知りたいな、と思いました。

「誘ってくれてありがとう。ママに聞いてきます！」とエリオットは答えました。

「それがいいね。ママがいいって言ってくれたら、土曜の朝早く出るから準備をしておくんだよ。一番いい服を着てね。神さまをお礼拝しに行くんだからね」とお隣のおばさんは言いました。エリオットは家に走って帰り、行ってもいいかお母さんに聞きました。お母さんはいいよと言ってくれました。

土曜日の朝、エリオットは教会に行くのだと思うとワクワクしながら起きました。そして素早く

一番良い服を着ると、お隣に走って行きました。

おばさんがドアを開けるとエリオットは、「もう行けるよ！」と言いました。おばさんは「ハッピーサバス！」と言いました。そしてエリオット君のことをじっと見て、「朝ごはんは食べたの？」と聞きました。

エリオットは首を振りしました。朝ごはんの用意ができる前に家を出てきたのです。「ここで食べていく？」とおばさんが言ったので、エリオットは、今度は、うん、とうなずきました。おばさんは、「じゃあ、そうしよう」と言うと、ご飯と、トマトのシチューをお皿によそってくれました。とっても美味しいシチューでした。食べ終わるとエリオットは、おばさんとおばさんの家族と一緒に、車に乗って教会に行きました。

安息日学校には知っている人が誰もいなかったもので、すごく人見知りをしてしまいました。1人きりで座っていましたが、それは全然気になりませんでした。初めてノアの箱舟の話を聞いて、エリオットはびっくりしました。そして、神さまの言うことを聞くのは、大切なことなんだな、と思いました。ノアも、ノアの家族も、動物たちだって、神さまの言うことを聞いて箱舟に入りました。けれどもそれ以外の人たちは、神さまの言うことを聞かずに、みんな洪水で死んでしまったのでした。エリオットは、いつも神さまの言うことを聞こうと決心しました。

エリオットは家でお母さんにノアの話をしました。

「それは良いお話ね。エリオットもノアさんみたいに、神さまの言うことを聞きましょうね」とお母さんは言いました。エリオットはにっこりしました。もう、いつも神さまの言うことを聞こうと決めていたからです。「おばさんと教会に行くの楽しかったよ。毎週行きたいな」とエリオットは言いました。

次の安息日、エリオットはまたおばさんと一緒に教会に行きました。でもこの日は、もう人見知りはありませんでした。話しかけてきてくれた子たちがいて、新しいお友だちができたのです。エリオットは聖書のお話を聞くのが特に好きでした。そして家に帰ると、またお母さんに、聞いてきたお話を教えました。

お母さんは段々と、エリオットが教会で聞いてきたお話を聞くのが楽しみになってきました。そして、聖書の物語をもっと聞きたいという気持ちが大きくなって、とうとうある安息日に、エリオットと一緒に教会に行きました。エリオットはとても幸せでした！

それからまたしばらく経ちました。エリオットのお兄ちゃんとお姉ちゃんも、おばさんやエリオット、お母さんと一緒に教会に行くようになりました。

こうして、教会に行ったことのなかった家族が、今は毎週安息日に教会に行くようになりました。

エリオットは、今は 12 歳です。まだ 7 歳だったときに、お隣のおばさんが教会に誘ってくれたことをとてもうれしく思っています。

「もし他のアドベンチストの人たちも、おばさんが僕にしてくれたように隣人を愛したら、キリストのところにたくさんの人を連れてこられると思います。愛をもって人と接していたら、キリストに従いたいと思う人が増えていきます」とエリオットは言っています。

今期の 13 回献金の一部は、エリオットの国ガーナにある看護学校のために使われます。その看護学校では、学生たちにイエス様のことと、病気の人をどうやって助けたらよいかを教えています。たくさんの献金を計画してくださっていることを感謝します。

〈お話のヒント〉

- 子どもたちに、地図でガーナ共和国の位置を示しましょう。アサマンの位置も示すと良いでし

ょう。今回の 13 回献金は、アサマンにある、看護師と助産師を養成するセブンスデー・アドベンチストの大学のサポートに用いられます。

- 子どもたちに、このお話のおばさんのように、お友だちや近所の人を安息日学校や教会に誘うよう促してください。
- フェイスブックで写真をダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- 西中央アフリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/wad-2023.

- この話は、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の以下の項目の具体例です。

「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No. 5）

「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」（「霊的成長の目標」No. 6）

「青年が神を第一とし、聖書的世界観を実践できるように支援する」（「霊的成長の目標」No. 7）
詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

宣教メモ

- フランシス・ドルフィン（1914 年頃没）は、ガーナで生まれた最初のアドベンチスト宣教師です。彼は安息日に関するアドベンチストの雑誌を読み、自分が学んだことを祖国で伝えようと決心しました。
- フランシスは米国のアドベンチスト指導者たちに何通もの手紙を送り、アドベンチストの雑誌と宣教師を西アフリカに送るよう求めました。最終的に、教会は 1892 年 9 月にローレンス・チャドウィックという人物を派遣しました。

6. お昼を買うお金がない！

ガーナ



アーチャ

18歳のアーチャは、西アフリカのガーナに住んでいます。ある日、高校に行くためにバス停に向かいながら、アーチャは涙を流していました。

学校に行くのが嫌で泣いていたのではありません。お昼ご飯を買うお金がなくて泣いていたのです。家を出るときに、お母さんは15セディくれました。セディというのはガーナのお金の単位で、15セディは日本のお金で180円ほどです。学校までのバス代にちょうど足りるくらいでした。でもお母さんには、お昼を買うだけのお金がありませんでした。そして、お弁当にできるような食べ物も家にはありませんでした。

アーチャはバスに乗るときも、席に座ってからも泣いていました。泣く以外に何もできなかったのです。でもそこで、神さまのことを思い出しました。自分には何もできないけれども、神さまは何でもできます。だってイエスさまは、「神は何でもできる」

(マタイ 19:26) と言われたではないですか。バスに揺られながら、アーチャは涙を流しながら祈りま

した。

「あなたは何でもおできになるお方です。どうか、学校に着くまでにお金をください」

アーチャは、神さまはどうやってお金をくださるのだろうと考えました。もしかしたら、運転手がお金を集めに来的时候に、アーチャから集めるのを忘れるかもしれません。そこで、

「神さま、もしできたら、運転手さんが私からお金を集めるのを忘れるようにしてください」とお祈りしました。

でも別のことが起こりました。

白髪のおじいさんがバスに乗ってきました。アーチャの隣の席しか空いていなかったのも、おじいさんはそこに座りました。

「大丈夫かい？」とおじいさんはアーチャに言いました。

アーチャは泣いていて返事ができませんでした。

そこに運転手がバス代を集めに来ました。するとおじいさんは、50セディ(600円くらい)を取り出して、自分とアーチャの分のバス代を払い、余った20セディをアーチャにくれました。

アーチャは泣き止んでお礼を言おうとしました。けれどもおじいさんはあっという間にバスを降りて行ってしまいました。アーチャはおじいさんを追いかけてバスを降りました。お礼が言いたかったのです。ここから高校までは歩いて30分ほどだったので、あとは歩けばよいと思いました。

けれども、おじいさんを探しても見つかりません。消えてしまったのです。

そこに大雨が降り始めました。バスはもう行ってしまいましたが、このまま雨の中を歩いていたらびしょぬれになってしまいます。タクシーを拾おうかとも思っても、どこにも見当たりませんでした。

どうしようかと困っていると、車が止まり、車から「乗っていきますか」と声をかけられました。

ガーナでは、歩いている人を車に乗せてお金を稼ぐ人がいます。アーチャは学校の住所を言って、その人に送ってもらいました。

学校に着いたアーチャはびっくりしました。送って来てくれた人は、お金を払ってほしいとは言わず、逆に、50 セディくれたのです。アーチャは、この人がなぜお金をくれたのかわかりませんでした。でも1つだけ確かなことがありました。アーチャが家を出たときは 15 セディしかなかったお金が、学校に着いたときには 85 セディになっていたことです。学校に行く途中に、神さまはお金を 6 倍近くまで増やしてくださったのでした。

アーチャは、神さまは、信仰をもって願う人に本当に何でもしてくださるのだと信じています。

「わたしが学校に行く途中でお願いしたら、神さまは答えてくださいました。しかも、お願いした以上のものをくださったのです」とアーチャは言っています。

その通り、聖書には、神さまは「わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる」(エフェソ 3:20) と書いてあります。

その日学校で、アーチャはトマトのシチューとご飯の昼食を買いました。とっても、とっても美味しいお昼ご飯でした。

アーチャは今、今期の 13 回献金を受け取る看護学校で学んでいます。ガーナの看護師と助産師の養成学校で、より多くの学生たちが学べるよう、献金をしてくださることに感謝します。もう1つのプロジェクトは、カメルーンに英語とフランス語の2か国語で学べる小学校を作ることです。



〈お話のヒント〉

- フェイスブックで写真をダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- 西中央アフリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/wad-2023.

- この話は、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の以下の項目の具体例です。

「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」(「霊的成長の目標」No.5)

「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」(「霊的成長の目標」No.6)

「青年が神を第一とし、聖書的な世界観を実践できるように支援する」(「霊的成長の目標」No.7)

詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

〈13 回安息日の前に〉

- 12 月 30 日に 13 回献金を持ってこられるよう、親たちに向けたメッセージのメモを子どもたちに持たせましょう。子どもたちに、伝道のための献金は、世界中に神様の言葉を広めるための贈り物であるということ、また、13 回献金の四分の一は西中央アフリカ支部の2つのプロジェクトのために使われることを伝えましょう。プロジェクトについては大人の『聖書研究ガイド』の裏表紙をご覧ください。
- お話の前後に、西中央アフリカ支部の地図を見せると良いでしょう。今回の 13 回献金を受け取るカメルーンとガーナを示しましょう。

◀今期の第 13 回安息日献金を受ける
ガーナのアサマンにある
セブンスデー・アドベンチスト看護助産師養成学校。